

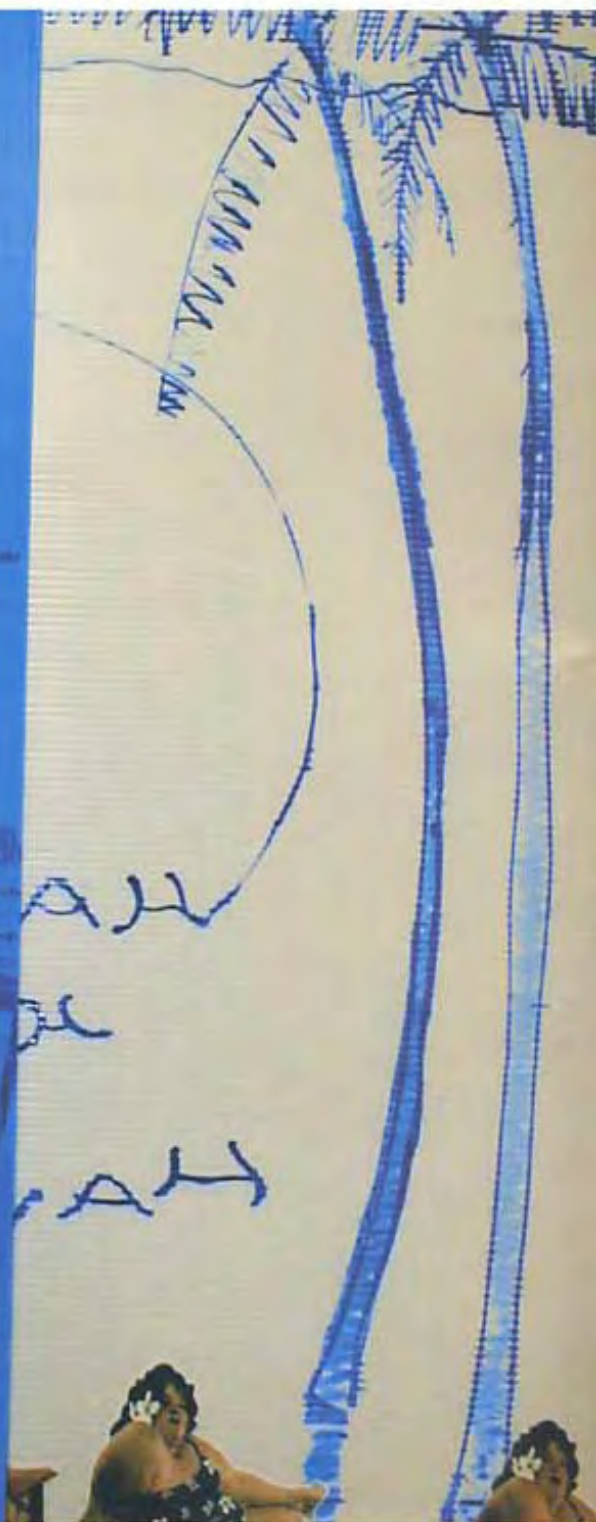
六花

俳句雑誌

りつか

11

designed by Tomoko Tanaka



訪 戴

山田六甲

無花果に水子のまなこ詰りたる

秋霖の有馬に蕎麦をすすりけり

金泉の底は金泥秋すだれ

松茸の精進料理精進す



石橋の影をくぐりし秋の鯉

ひもじさの泥吐きにけり秋の鯉

六かしい顔してむかご飯を盛る

古泉閣隣の客が柿を食ふ

枯蓮にとびうつりたる飛蝗かな

手で松葉払ひて終る松手入

特別同人作品

六^{りっ}
 卿^{けい}
 集^{しゅう}

ピ
カ
イ
ヤ松
山律^{りっ}
子^し

この土器でどぶろくのんで古代人
 せつかくに生まれて来たんだ暖まる
 木の根っこでも春を信じているんだよ
 ピカイヤと云う原始生物冬の海
 枯野かな屍の君のゆくところ

(五十音送り)

ジンジャの花

小田 元

新茶くむ死後を話して夫と妻
 市役所の軒先借りて燕の巢
 秋近し琴の教本古りしまま
 ちつち蝉占ひの灯を離れざる
 横文字の看板ふえてジンジャの花

た た み

梶浦玲良子

たそがれは明日ほのぼの合飲の花
 炎帝の親子を乗せて猫車
 穀象のひとりで帰る畳かな
 鶏鳴に花橘の薄まぶた
 すれ違ふよもやの人や遠花火

花 芙蓉

木内美保子

夕焼を握りしめたる花芙蓉
 かぎり火や火花散らして川涼し
 ふと触れし草が指切る露の野路
 はなれ見る夜風にゆれる盆踊
 敗戦忌悔ひて還らぬ事思ふ

きつねうどん

中村 房枝

和服てふ必殺技や文化の日
 寒さうな目をして普段着の舞妓
 着水の白鳥ふいに仁王立ち
 つくづくと国痩せにけり耳袋
 この冬を乗り切るきつねうどんかな

短

夜

鳴海

清美

蹴 帷 目 激 金
 ら 子 札 流 剛
 の れ の の の の
 た 衿 の の の の
 り の 距 上 杖 杖
 堅 離 離 離 離
 さ 石 吊 吊 吊
 よ 庭 橋 橋 橋
 ネ の の の の
 オ 大 大 大 大
 ン 西 西 西 西
 点 日 日 日 日
 き 点 点 点 点
 夜 夜 夜 夜 夜

八

月

二瓶

洋子

を と と と と と
 と と と と と と
 の の の の の の
 線 香 花 火 火
 香 花 火 火 火
 堪 堪 堪 堪 堪
 ふ ふ ふ ふ ふ
 る る る る る
 厨 厨 厨 厨 厨
 か か か か か
 な な な な な

冷 房 を と と と と
 八 月 や を 自 嫌
 腰 伸 ば せ 姿 勢
 羅 は 黒 こ そ よ け れ 帯 固 く

これ以上待つくらみなら蝉になる ことり

空蝉を手に転がして木に戻す

蝉の死を拾ふ空蝉より軽し

森の蝉ここで生まれてここで死ぬ

蝉時雨わたしが消えてゆきにけり

けたたましい蝉声の中で長時間何かを待っていたが、よい結果が出なかった。ついに主人公は爆発、「待つ苦しみよりも、短命でいいから、蝉になって泣きわめいた方がましだ」というのかも。いずれにせよ「蝉になる」という発想に驚く。…ああそうか、主人公が待っていたのは蝉の匂だったのか。

檀木集

盆用意

三井孝子

寺真似て庭に箒目盆用意
境内へ入ればさるすべりさるすべり
提灯や日に二度出合ふ夏祭り
立秋や起き出す前の村歩く
汗ぬぐふ髪的一本へばり付き

麦の秋

松本文一郎

寅さんの柴又を発つ麦の秋
鳥形の雲を浮かべて麦の秋
夏木立湖底に透ける鳥居かな
汗拭ふ筋金入りの刀鍛冶
鬼灯市買ふも買はぬも浅草寺

蝉時雨

水谷ひさ江

子離れのあとをただして蝉の殻
蝉時雨只ひたすらに歩くのみ
蝉の穴巨大迷路の出口やも
隣人の朝からカラオケ蝉時雨
空蝉やデカルトカント粗大ごみ



菜根譚 六甲

汗拭ふ筋金入りの刀鍛冶

松本文一郎

単に筋金が入っているばかりでなく精神・身体がしっかりしていることをも筋金入りと言う。文字通り刀鍛冶は生半可なことで刀を鍛えられるわけがなく、物理的にも火を使う職場であり、冬場でもかなり暑いのに、ましてや夏場の鍛錬は火玉と湯玉と玉の汗が飛び散って暑いどころではなからう。また、鍛錬中に汗を拭うひまなど無いだろうから、屹度この句は一段落ついで汗を拭っている場面と思う。鍛冶の拭う汗は筋金入りの汗だから少々拭いても拭いきれない滂沱のあせにちがいない。軟弱な句をつくる Eizo たちよ自らを鍛えよ。もっと悩めよそして筋金入りの作家となれ。他人の揚げ足をとる前に自らの軟弱さを反省せよ。

汗ぬぐふ髪的一本へばり付き

三井 孝子

掲句はことさら解説する必要などないほど平明で明確に表現されている。拭っても拭いても吹き出してくる真夏の汗は拭いても一本の髪がへばりついて離れないのだ。たった一本の髪の毛が暑さをいつそうつららせていると言うのだ。暑さの中のいらいら感が髪の毛

一本で表現できるとは。俳句は物で表現するという見本だ。

隣人の朝からカラオケ蝉時雨

水谷ひさ江

掲句もいらだつ材料を提示した。そのいらだつ材料とは蝉時雨と隣人のカラオケ。隣人騒音問題は現代の悩める社会現象の一つとしてマスコミをにぎわせている。カラオケも自らが楽しむ分にはどんなに音量を上げててもいらなどいらない。むしろ楽しさが音量に比例するくらいだ。が、しかし、それを聞かされる隣人にとつては音の暴力である。ただでさえ真夏の朝からうるさい蝉の声に上乘せして聞きたくもない下手くそなカラオケを聞かされたのでは殺意が頭をちたげようというものだ。暑さと苛々の代表的な材料を詠んだ。

青葉風競馬の芝を吹きぬける

宮森 毅

昔は随分と競馬のイメージに暗い影が付きまどつていたが現在ではギャンブル性は同じであるけれど、健全な娯楽という感じに変わってきた。そのため努力の一つに、競馬場が公園化されてきたことだ。家族連れで競馬場に行つて子供に馬の姿を見せるお父さんも増えた。掲句はそのような雰囲気の中の競馬場を詠んでいる。JRA のコマージュシャルコピーに使ってもらえないものだろうか？青葉の風が吹き抜けるということが競馬馬の疾駆をイメージしている清々しい句。

六花集

六甲選

田尻 勝子

ひと群れの彼岸花なりさびしけれ

雑草の花を従へ彼岸花

虫の声抱き直したる抱き枕

葛の葉の崖をおほひて水に垂る

車窓より茄子もぐ友の見えにけり

近藤 貞子

浜木綿や潮の香りの始発駅

蝸や独りの午後の古今集

抱き上げし子の挽ぐ桃や旅の朝

真桑瓜床机に食みし日の遠く

エプロンに子からの手紙茄子を焼く

延川 笙子

一面に桔梗咲きたり無縁墓

満月を背景に見る火花かな

水中市名所旧跡上の空

また聞きの幽霊話で涼をとる

今はもう蝉鳴きやみてをりにけり

この池は日の通りみち十一月

被災地にかかつてゐたるオリオン座

磐座に住みついてゐる乾風かな

踏みたがる蹠勤労感謝の日

柳葉魚焼くアイヌの呪文おぼえたて

永田 勇

仏壇の供物無くなり盆の明け

探し来て一服したり百日紅

夕焼けて瀬戸内海の小舟かな

黒葡萄皮のままにて吸ひにけり

群衆の叫びひとつに大火花